
怖い話

滾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怖い話

【著者名】

ZZマーク

N7198A

【作者名】 滾

【あらすじ】

心靈スポットに興味本位で向かった青年達。しかし恐怖は”違つた形”で現れて・・・。

(前書き)

どつかで聞いた話に背びれ尾びれ胸びれをべたべたくつつけたお話を
です。

夏になるとや、無性に肝試しがやりたくなる。

まあ、夏＝肝試しなんてもんは単なる刷り込みで、別に暑くなつたから恐怖を求めるわけじゃない。

人間つてのは恐怖を恐れるくせに、なぜか自ら“その中”に入つていこうとする。

まあそんなわけで、俺は今年もいつもと同じように、友達数人と心靈スポットに行くことにした。

山。そこのある墓場を見つけてしまふと、三日以内その人に死が訪れると言われる、イワクツキの心靈スポット。俺達は夜を待つて、その心靈スポットに行くことにした。クネクネしている山道を車で登つっていく。

しばらくして丁度いい場所を見つけて、車をそこに停める。好奇心やら恐怖心やらで高鳴つた心臓を落ち着けながら、墓場を見つけるべく俺達は山を登つた。

さて、

どれくらい経つたろうか？

一時間近く歩いて、結局俺達は墓を発見できないま、山頂に着いてしまつていた。

勿論、ここまで墓場なんて見つけていない。それどころか、樹木以外何にも見つけていなかつた。

「・・・おかしいな」

俺は予定とは違つた、怖くもなんとも無い展開に拍子抜けした。

「所詮は噂話だ。こんなもんだよ」

周りを見渡す俺に、友達が言つて肩に手を置く。

そんなもんか、と、俺は肩を落として、

「あ～・・・、マジで期待外れだ

」

ガサガサ・・・

「 たよッ！？』

言い終わる直前、

音がした。

俺達が立っている右側、草木が生い茂る場所から。

思わず俺は飛び退いて、友達の間にスライドするように身を隠した。

「お、おい・・・、今、音・・・・」

「した・・・・、な・・・・」

友達全員で、視線を草むらに集める。

俺達は無意識の内に体を固めて、鼓動を高鳴らせていた。

と、

次の瞬間

「ツー！」

突如草むらから現れるオッサン。

どこにでも居るような、少し小太りしたオッサンだ。

幽霊か！？とも一瞬考えたが、足もあるし、第一こんなリアリティに溢れるオッサン靈なんて怖くも無い。

「な、何だよ～」

友達のその一言に、俺達の気も緩まった。

俺達はなんともいえぬ安心感に肩の力を抜き、

「マジビビッたって、マジで！」

「あはは

笑った。氣を紛らわすかのように笑った。

何かスゲエ安心した。

が、

「オイ・・・」

突然オッサンが何かを言つたので、俺らはまたびくついて身を固まらせた。

一瞬で俺達の空氣を凍らせて、オッサンはこう言つた。

「お前等、ここに肝試しに来たんだろう?」と。

「だったら氣をつける。昔ここで殺人事件があつたんだ。知らないか?」

言つて、オッサンは首をかしげた。

俺達は顔を見合わせたが、誰もそんな話は聞いた事がない。その空氣を呼んだんだろう。オッサンはそのまま続けた。

「そん時にちつさい女の子が殺されてなア、今でもこの辺りに出てつて噂だ。もしも車に乗つて女の子が『助けて』と言つてきても、絶対に扉を開けちゃいけない。そのままあの世に連れて行かれちまうからな」

氣をつけな。オッサンはそれだけ言つと、再び暗闇の中に消えて行つてしまつた。

ダツ

誰がともなく、氣付いたら俺達はダツシユしていた。

ダツシユで、登つてきた坂道を逆に下つていく。

完全に、オッサンの話に呑まれてた。

友達を押しのける勢いで、何度も転びそうになりながらも何とか車まで到達した。

全員の姿は確認できる。よくある怖い話なんかみたいに、誰かが欠けている、という事はなかつた。

飛び乗るよつに車へ搭乗し、エンジンをつかむ。難なくエンジンは点いた。

ここままで心靈的な事は起じつてない。

「とつとと出せよッ！」

「解つてゐよッ！」

ギュキヤキヤキヤキヤキヤ・・・！

タイヤをスピンさせながらも、急いで山道を下る。
対向車もない。走つてゐる車は俺等のくらいなもんだ。
それが逆に、恐怖心をあおつた。

クネクネした山道を、さつきとは逆に走つて行き

瞬間、

「おい！前！」

「え！？あ ッ！」

キキキ

ツ

急ブレーキで車を止めた。
見えたからだ。
小さな子供が。
ライトに照らされて、
車道の真ん中」。
あれは多分、

女の子

間髪入れずに、車の外から声がする。

「助けて！」

と。

ダンッ ダンッ ダンダンッ

女の子が車のボディを必死で叩いている。その音と、「助けて！」

という声に、俺達は半パニック状態に陥った。

これがあのオッサンが言つてた女の子の靈だ！

解つた瞬間には、俺は友達に叫んでた。

「おい！おいッ！早く！早く車出せって！」

「だから、解つてるつてッ！」

女の子の靈から逃げるようにして、俺達は再び車を出した。

もうそっからは殆ど覚えてない。

気付いたら家の近くまで来て、みんなちゃんと居て、あの女の子の靈を連れてきてるような感じでもなかつた。安心して、俺達はそのまま解散した。

何事も無く口は過ぎて、

そして数日後。

俺と友達数人は、俺の家に集まつていた。

特別意味があるわけじゃない。単純に、遊ぶために皆を呼んでいた。

『道路では渋滞が続き

テレビからは聞き手の居ないニュースが垂れ流しになつている。

誰もそれに耳を傾けてることなくニュースは進んだが、

『次のニュースです。　山で殺人事件が

このニュースが流れた瞬間、全員の視線がテレビに向いた。

「あ、おい、この山つて、俺等が行つたトコだよな・・・？」

「そうだ、あの山だよ」

「あ、じゃあこの殺人事件つて、あのオッサンが言つてた・・・？」

「え・・・、でもおかしくないか？日付が・・・」

オッサンは事件が起きたのは“昔”と言つていたが、ニュースが告

げる日付では、事件が起ったのは最近のこと。

それも、この日付は……。

「これって……、俺等が山に行つた日じゃねえ……？」

そう、その殺人が起きた日とこいつのは、俺達があの山に行つた日。ニコースは告げる。

『容疑者の 被告は、深夜に殺して、そのまま埋めたと供述

しているとの事で

』

「おー・・・

俺達の間に、嫌な予感がよぎった。

『被害者の ちゃんは五歳の女の子で

アナウンサーが告げると同時に、その女の子の画像がディスプレイに表示された。

瞬間、

「 ッ

俺達は凍りついた。

その子こそ、俺達が車に乗つていたとき、駆け寄つて助けを求めてきた女の子だった。

「マジかよ・・・」

ニコースが告げる死亡推定時刻からすると、あの時の彼女は幽霊何かではなく、実在する、助けを求める少女だったらしい。

「じゃあ、あの時俺等が助けてりや・・・」

俺達は今までにない後悔に身を打たれて頃垂れた。

しかし、

さらに恐怖に陥るのは、これから

『これが、 被告の顔写真です』

アナウンサーが告げる。

俺達はそれを見た瞬間、背筋が凍つた。

ディスプレイに表示された犯人。それは、

あの、山で見たオッサンだつたんだ。

(後書き)

この怖いところが解らない人もいるかと思います。そんな人は、もう一度よく考えてください。
何が怖いのか解った瞬間、「アハ体験」と共に背筋が凍ること間違いなし！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7198a/>

怖い話

2010年10月28日03時27分発行